

弟子、十二弟子、ユダ

ヨハネ6:60-71、創世記49:8-12

ローマ14:1

遠藤一則牧師

序論：会社について考える

下町ロケットと言う小説を読みました。その中に出てくる人間模様が面白く、一日半で読み通してしまいました。なぜ面白かったか。そこにキリストの弟子たちに似たような性質や事件を見ることが出来たからです。下町の中小企業、町工場が取引を削られ、財政難にあえぎながら、大企業に引き込まれていく。社長の思惑とは違う意見が社内に渦巻き、不平や不安に取り込まれる者、その中でも社長を支えようという者、そして裏切る者が出てきます。それを読みながら、こいつは正しい、こいつはいかん、という考えで登場人物を判断し、主人公に肩入れしている自分がいました。しかし、それはちがう。会社を一人の人格としてみるならば、その中にいろいろな感情があるのだ、ということに、はたと気づいたのです。

I. イエスの周りにいた人々

小説ではいろいろな人物がでてきて、失敗、成功、悩み、喜びを通してドラマが展開されます。その中にいる悪役的な人でさえもストーリーの中では欠かせぬ存在であり、それによって主人公が引きたてられたり、悪役本人が改心したりしてドラマチック相乗増していきます。

イエスの周りにもいろいろな人たちがいました。群衆、弟子、十二弟子、女、幼子、敵などなどです。そして主イエスはその人たちを全員愛されました。教会も同じです。いろいろな人がいて、時には誤解が起きたり、争いがあったりします。しかし、そこにいる人たち全員が例外なく、主に愛されているのです。(ローマ14:1)

II. イエスが十二弟子を選んだ

イエスは自分の周りに十二弟子を置きました。彼らは決して優秀な人たちではなかったのですが、単なる凡人でもなく、それぞれ意味があって選ばれました。ヨハネの中では主が選んだと書いてあります。後代の私たちがどんな評価をするか、などとは関係なく、主が選びました。それでよかったです。私たちも同じく主に選ばれた者です。ならば堂々と主の弟子であると公言してかまわない、いやむしろそうすることを主に望まれているのではないのでしょうか。何と感謝なことでしょう。

III. 悪魔がいること

ユダという名前は、創世記の十二部族の祖先に由来します（創世記49章）。旧約を見ると非常に良いことが書かれています。そして、その家系からダビデ、ソロモン、主イエスが出てくるほどなのです。しかし、イスカリオテのユダがイエスを裏切って以来、ユダ=裏切り者というイメージが定着しました。

イエスはこの男の事をご存知でした。彼が裏切ることもです。ではたして主が彼を差別し、はくがいたのでしょうか。否!!! 他の弟子たちに対すると同じように、彼にも誠実に接しました。そして、彼を通して十字架へと進むことになりました。このような男をも愛し、側におかれたイエスの度胸には驚愕します。

IV. Mr. Apostles

十二弟子を一人の人格として捉えたらどうなるでしょうか。自分の中にはペテロのようなところがある、調子に乗りやすい。トマスのように疑い深い。ヨハネのように喜怒哀楽がはげしい。そしてユダのようにイエスを見捨てるかもしれない。けれどもそれを全て一人の人として主イエスは受け入れているのではないのでしょうか。そして、やはり愛してください。

結論：超人イエス

ニーチェという哲学者がいます。「神は死んだ。」といった男です。ただ彼の著書にも納得できることがあります。超人をめざせということです。超人とは何か。自分の人生におけるいい事も悪い事も、そのまま受け入れ、肯定できる人間です。また超人への成長過程は、人からまたは自分から責任を負って生きるらくだ、その価値観に反逆し自分で考える獅子、そして、強制されもせず、評価も気にせず自らの意思で遊ぶ幼子へと進みます。超人=主イエスと言ってもいいでしょう。超人イエスは私たちをよくも悪くもひっくるめて、しっかりと受け入れ、幼子のごとく、何の見返りも期待せず、今日も愛し、とりなしてください。

下町ロケットの物語の中、最高の見せ場は、侮られ、馬鹿にされ、大企業からダメ出しを食らった町工場の社員が、「我々にはその大企業より先に開発した製品がある」と言い、立場を逆転させるところです。

私たちをもこの世で人から、また悪魔からダメ出しを食らうかもしれない。でもはっきりとこう宣言しましょう。「私は主に愛されている。」と。